＼合併号！／

3 2023　4 2023

ニジェール支所便り

支所長よりひとこと

暑い!　日中の外気温は40～42度、早朝でも30度近くが続いている。

しかし、酷暑中のラマダンも無事4月21日に明け、ニアメ市民もホッとした様子である。

テニスコーチのMoussaは友人に頼んでティラベリから買ってきてもらった鶏とホロホロ鳥10羽ずつを家族で食べて体が重いという(絶対食べ過ぎでしょう)。

3月から4月にかけても来訪者や各種行事が盛りだくさんだった。

「アフリカきれいな街プラットフォーム」活動の一環として例年実施している学校での清掃キャンペーンでは環境省･教育省と連携し3校の中高学校を対象に環境衛生や学校菜園の講義とともに、生徒たちによる「きれいな学校」の寸劇･標語コンクールも実施した。生徒たちの演技力はなかなかのもの。外壁がない学校の敷地に無断で入ってタバコポイ捨てする酔っ払い役の生徒に大笑い。これ、皆が実感している結構切実な問題なのである。度々起こる藁ぶき教室火災の原因にもなりかねない。

セネガル、マリからはJICA･UNICEF合同ミッションが来訪し、ニジェールの「みんなの学校プロジェクト」の現場を視察。学校運営委員会活動や小学5年生の算数授業を見学し、学校関係者と意見交換した。ニジェールの経験を参考としてもらえるのは学校関係者にとってもモチベーションが高まることに。

コロナ禍の影響で到着が遅れていた農業水利整備公社（ONAHA）への供与機材もほぼ全て到着し、一方井大使、牧畜大臣（出張中の農業大臣の代理）により盛大な引渡式が開催された。灌漑施設整備の拡充を通じてニジェールの食料生産基盤の強化に大きく貢献してくれるだろう。

3月中、ニジェールには米国のブリンケン国務長官やマルパス世銀総裁など要人が来訪し、平和と安定、食料安全保障、教育、農業、エネルギー分野などへの協力強化を表明しました。

国境方面で続く、村や軍・警察施設への武装勢力による攻撃、それによる難民・国内避難民の増加、最近はアルジェリアから強制送還される移民急増への対応なども急務となっています。EU諸国や国連諸機関によるニジェールを支える動きが活発になっています。

最後に、ニジェールやマダガスカルの「みんなの学校プロジェクト」で活躍してきた福長輝幸さんが3月14日、若くして亡くなられました。支所で制作した動画では学校運営委員会（COGES）の役割を熱く語り、これからの教育開発を引っ張っていく存在でした。

プロジェクトの原総括が言うように、いつも太陽のような明るさで、当地では仕事のほかにもテニス練習にも参加してもらい野球仕込みの元気溢れるプレーが印象的でした。ニジェール支所一同、心からご冥福をお祈りいたします。（ニジェール支所　小畑）

ニジェールのよいところ

PASVA総括小川です。ニジェールには「サヘル地域における貯水池の有効活用と自律的コミュニティ開発プロジェクト（VRACS）」でお世話になった2012年から2015年、今のPASVAになって2019年から2023年と途中長く空きましたが、行ったり来たりしながら、もう足かけで十年以上になってしまいました。わたしは長期に継続して住んだ経験がないので、なかにはあたらない部分もあるかもしれませんが、今回はニジェールのよいところをわたしなりの視点で書いてみたいと思います。

1. 海苔が湿気ない

まず一番に思いつくニジェールのよい点は「海苔が湿気ない」ことです。自分も含めて多くの専門家の人達は、健康管理のためもあって自炊しており、自分の嗜好に合った食材を少しずつ日本から持ち込んでいます。自分の場合は海苔が欠かせませんが、他の熱帯諸国だと持っていった海苔を置いておくと湿気てしまっていることが多く、味付け海苔などはベタベタになってくっついてしまって美味しく食べられません。しかし、ニジェールではこういったことはまったく心配する必要がありません。海苔はいつ出してもパリパリです。湿気るだけの水分が空気中にないのか、海苔缶を閉め忘れても湿気ることがないのです。日本から持っていった海苔はパリパリ感が強く、満足感が非常に高いものになります。

2. 食事のおいしさ

2番目に思いつくのは日々の「食事のおいしさ」です。200円程度の一杯飯屋から、7-800円ぐらいのフォミレス、5000円もする高級フランス料理まで、どのレベルの食事を選ぶかは個人の嗜好と懐具合に任されていますが、まず「まずい」というものにあたることはないと思います。個人的感想ですが、西アフリカの人々の舌は世界的にも肥えているように思います。また、一般的に旧仏領は特に食事文化が成熟しており、ニジェールはまさにその2つの範疇に入っています。もっとも食べ物のことなので、これには個人差があるとは思いますが、少なくとも自分は十分満足しています。

3. 時間の豊富さ

3つ目は「時間の豊富さ」です。日本にいるといつも忙しくて、毎日いくらあっても時間が足りないと感じているのは私だけではないのではないでしょうか。しかしニジェールにくると時間はふんだんにあることがわかります。こう言うと「ニジェールの専門家は仕事してないんじゃないか」とか「手を抜いているんじゃないか」などと誤解される向きもあるかもしれませんが、そうではありません。どう説明したらいいか…気持ちの持ちようが変わるように、時間の流れそのものが変わるのです。同じ時間であっても東京ではあっという間に過ぎ去ってしまう1時間が、ニジェールでは実にゆっくり流れていくことに来た人は驚くでしょう。ミヒャエル・エンデの「モモ」に出てくるようなセカセカした時間泥棒はニジェールにはいないのでしょう。ここではいまだに時間がニジェール川のようにゆっくりとながれているのです。ニジェールに来る

とそのような不思議な時間の流れを体験できます。もっとも時間のことなので、これも適応能力に個人差があり、人によっては次元の壁を越えることができないかもしれませんが…

4. 人の優しさ

4つ目は訪れた人が誰もが言うことで、今更わたしが言うことでもないのですが「人の優しさ」です。ニジェールの生活環境は非常に厳しいものがあります。屋内でも45度になる灼熱の4月、前触れもなく度々訪れるニジェール川の洪水、時としてまん延して人を苦しめるマラリア、多くのひとに不調をもたらす微細な塵をともなって1−2月にやってくる冷たい風。何年か毎に訪れる干魃は各地に飢饉をもたらし、家畜でやっていけなくなった遊牧民は盗賊団となって村落を襲い、食料を調達せざるをえなくなります。そのような厳しい自然環境とつねに背中合わせに住んでいるニジェールの人達は人間の力の限界というものを非常に良く知っています。ひとに無理を言ってもできることは限られており、みな神のもとで不完全な存在なのです。ですから神にはひたすら祈り、ひとには無理を言わずその苦労を慮って優しくしてあげる。ニジェールの人々はみなこのように接してきます。これは考えてみれば同じ人間として当然のことなのですが、生き馬の目を抜く大都市や世知辛い先進諸国にいては、なかなか実践することができないことです。でも大丈夫です。そのような人も、ニジェールにくれば、たくさんの優しい人に触れることができ、そのようなニジェールの人に囲まれ、本来の優しい自分というものに気付くことでしょう。ああ、なんて素晴らしいんだ、ニジェールは。　　（PASVA総括　小川）

プロジェクト・専門家等の進捗状況紹介
みんなの学校：コミュニティ協働による基礎教育の質及び男女間公平性の改善プロジェクト

以前の支所だよりでご紹介したティラベリ州紛争地域で実施予定のパイロットについて、ついに今年の2月に活動が始動しました。今回はその様子をご紹介させていただきます。

ティラベリ州のような紛争地域であっても学校運営委員会が機能し、自分たちでできることを模索している様子は過去の支所だよりでもお伝えしましたが、こうした地域で生徒の学びを確保するためには、解決しなければならない問題が山のようにあります。そうした問題に、ホストコミュニティと難民･避難民コミュニティが協力しあって取り組むことを促進するのが、プロジェクトが開発した「①危機管理（Securité）、②コミュニティ融和（Intégration）、③難民･国内避難民児童も含むすべての児童の学習（Apprentissage）モデル」です。フランス語での頭文字をとって、SIAモデルと呼んでいます。プロジェクトでは、今年の2月に校長、学校運営委員会代表、そして難民･避難民キャンプ代表に対して、本モデル導入のための研修を実施しました。このモデルには、以下3つの特徴があります

特徴1:ホストコミュニティとの情報交換の窓口ができ、学校運営委員会に難民･国内避難民の声が反映されるように、難民･国内避難民コミュニティ代表者を学校運営委員会事務局内にアドホックメンバーとして2名（うち最低1名は女性）を追加します。

特徴2:上で選出された難民コミュニティ代表者を中心に難民・国内避難民コミュニティからのホストコミュニティの住民総会への参加を促進します。この参加によりホストコミュニティーと難民コミュニティの学校改善のための参加が加速します。

特徴3:ホストコミュニティと難民・国内避難民コミュニティが協力して、身近な問題から働きかけられる仕組みを作るために、紛争地域がコミュニティにとってもっとも改善ニーズが高い「①危機管理(Securité)、②コミュニティ融和(Intégration)、③難民・国内避難民児童も含むすべての児童の学習(Apprentissage)、略してSIAの3要素を用いて問題分析・解決策特定を行います。以下は、SIAを用いて策定された活動計画の一例です。

要素	問題	可能な解決策
危機管理(Securité)	難民・避難民のキャンプ内で、児童が安心してレクリエーションや宿題をするための場所がない。	キャンプ内に、児童が集まって宿題をできるテントを立てる。また、特定の木の下を児童用のスペースとしてあてがう。
	学校にテロリストが来るなど、危険が迫った時の対処法に関する知識・情報不足	意識啓発・安全対策情報(緊急通報番号、危険発生時の避難のための安全ルート、アラートコード、避難所等)の共有
	近くにある政府軍キャンプでの軍事訓練とテロリストの襲撃の音が同じため、違いがわからず児童だけでなく大人たちも怯えている。	政府軍キャンプの軍事訓練スケジュールを住民総会で発表し、テロリストの襲撃ではないことが予めわかるようにする。
コミュニティ融和(Intégration)	難民・避難民児童の身分証、出生証明書など、行政関係の書類の紛失(これがないと中学に進学できない)	避難時に紛失した行政書類の再取得支援
	児童間の不信感	ホストコミュニティと難民・避難民児童の絆を深めるためのレクリエーション活動、啓発
	難民・避難民児童の物資不足(通学用の鞄や教材、文房具等)	ホストコミュニティからいらなくなった物資の回収と、難民・避難民児童への再配布
学習(Apprentissage)	夜に灯りがなく宿題をするのが難しい	ランプの購入
	難民・避難民児童の低学力の問題	補習授業の実施
	教室・教材不足	仮設教室の建設

平和構築・コミュニティ融和(SIAモデル)

特徴1:

学校運営委員会事務局に、アドホックメンバーとして、2名(うち最低1名は女性)の難民・国内避難民コミュニティ代表者を追加する。

特徴2:

住民総会をはじめとする学校運営委員会の様々な活動において、難民・国内避難民コミュニティの参加を促進する

特徴3:

「危機管理(Sécurité)、コミュニティ融和(Intégration)、難民・国内避難民児童も含む全ての児童の学習(Apprentissage)」の3要素を用いて問題分析・解決策特定を行い、活動計画に追加する。

SIAモデルを導入してから約1か月半後の3月末に、第1回目のモニタリング会合を開催しました。その結果、多くの学校で活発に活動が実施されていることがわかりました。以下は、その一部です。

- 対象88校のうち47校が難民・避難民児童を受け入れている。これら47校全ての学校運営委員会において、難民・避難民コミュニティ代表2名がアドホックメンバーに追加された。
- 対象88校全ての学校において、SIA問題分析・解決策特定のための住民総会が開催された。全参加者数は5,137名（1校平均58名）、うち1,886名（1校平均21名）が難民・避難民コミュニティから参加した。
- 47校に加え、難民・避難民児童がいない41校においても、難民・避難民コミュニティの住民総会への積極的な参加が確認された。
- SIA介入前は、対象校で受け入れている難民・避難民児童数は3,810名だったが、SIA介入後にはこの数が775名増加（約1.2倍）した。対象校88校の全児童数は現在16,376名、そのうち4,585名（全体の27%）が難民・避難民児童である。
- 多くの学校が、生徒数の増加に対応するために、ホストコミュニティと難民・避難民コミュニティが協力して、仮設教室の建設に取り組んでいる。また、難民・避難民児童だけではなく、ホストコミュニティ児童も対象に補習授業を実施し、学力の底上げを図っている。
- 現在の直接裨益者数:21,513名（暫定的に、第1回目住民総会参加者＋対象88校の児童数と定義）

この他にも、コミュニティ間のネットワークが構築されたことで、ホストコミュニティにとっても有益となる安全対策情報などが難民・避難民コミュニティから共有されるようになったことや、難民・避難民コミュニティ内にも人的リソースがたくさん眠っており、そうしたリソースを生かしながら学校のために協働できるといった声が上がりました。

例えば、高い教育レベルをもつ難民キャンプの若者が補習授業の地域ファシリテーターを務めるなど、ホストコミュニティから難民・避難民コミュニティに対する一方通行の支援ではなく、相互に助け合う様子が伝わります。

他方、対象88校のうち今はまだ当該児童を受け入れていない41校の住民総会においても、難民・避難民キャンプから多くの参加者があったことはプロジェクトにとっても驚きでした。難民・避難民コミュニティもホストコミュニティとの繋がりを望んでおり、そのきっかけが学校運営委員会による住民総会であったことは、このモデルが学校環境を整えるだけでなく、社会的結束を高めることにも貢献できる可能性を示していると言えます。

プロジェクトでは、引き続きSIAモデルの進捗をフォローしていきたいと思います。

（みんなの学校プロジェクト　専門家一同）

ニジェールでゴミを集める日本人（第 40 回）

ニジェールの仕事には忍耐力と動くことが必要―日頃のご支援に感謝です

支所便り2016年7月号から不定期でお届けしている、京都大学アフリカ地域研究資料センター・大山修一教授の「ニジェールでゴミを集める日本人」シリーズ第40話。今回はゴミの運搬状況について寄稿いただきました。

2023年1月になって、ニアメ市清掃局の責任者が変わりました。これまでの協議の積み重ねで協力関係を築いてきたにもかかわらず、ニアメ市内からのゴミの運搬は完全にストップすることになりました。といっても、この時点でダンプカー30台分しかゴミを運搬することができておらず、目標の150回（1200トン）には遠くおよばない状況でした。計画では6ヶ月で150回の運搬を完了する予定でしたが、すでに3ヶ月以上が経過していました。

われわれは緑化サイトまでの道路をつくり、道路上の岩や小石を手で取り除き、大型ダンプカーが通行できるような状態にし、ニアメ市清掃局の車両を受け入れる体制をととのえました。道路を整備することによって、近隣の住民からは市場や病院へのアクセスがよくなり、警察やジャンデルメリー（憲兵隊）の治安維持活動によって治安が良くなると感謝されました。いまでは、バイクや自動車だけでなく、牛やロバの引く車、自転車が通行するようになりました。

道路整備：（1）グレーダーで、道をつくります。畑をつぶさないようルート選択が重要です。

道路整備：（2）グレーダーはパワフルですが、細かいところは行き届きません。車のパンクの原因となる岩を
スタッフの手で取り除いていきます。ニジェールでは、道路は町へのアクセスだけでなく、治安維持のためにも重要です。

ニアメ市清掃局との協議が白紙に戻ったことにより、ゴミを運搬するには、なんらかの打開策が必要となりました。そんなとき、光栄なことに、2月に第31回 松下幸之助花の万博記念賞 松下幸之助記念奨励賞（公益財団法人 松下幸之助記念志財団）を受賞することができ、その賞金の一部を活用して、わたしは中古のトラック（トヨタ・ダイナ150）を購入することを決めました。アフリカ研究者として、この賞に初めて選定されたことは、とてもうれしいですし、中古トラックを購入することもでき、この賞を授与してくださった松下幸之助記念志財団には、深く感謝しております。

この中古トラックは1998年製で、ニジェールでは人気の高い車種です。しかし、エンジンやラジエター、車軸に修理が必要で、購入した当初には期待どおりにゴミを運搬できませんでした。それでもゴミが満載され、1度に1.8トンのゴミを運び、緑化サイトとのあいだを29往復しました。ゴミを積載し、トラックを運転するのは、われわれのスタッフです。そして、スタッフのなかで希望する者には運転免許の取得を奨励し、金銭的な支援をしています。ゆっくりですが、着実な人材育成にも努めていきたいと考えています。中古トラックによるゴミの搬送量は合計で52.2トンとなり、現在も中古のトヨタ・ダイナはゴミだけでなく、道具や資材、人員、食料、飲料水を乗せて活躍しています。

中古のトヨタ・ダイナ150（1998年製）。走行距離は不明ながらも、大活躍。

2023年1月以降も、カウンターパートの環境・砂漠化対策省のクリバリー氏はJICAニジェール支所とともに、ニアメ市清掃局に働きかけつづけており、緑化サイトまでのゴミ運搬の可能性を模索してくれています。そんななか、環境・砂漠化対策省から、ニアメ市のラザレ地区に存在する巨大なゴミ捨て場のゴミを撤去する計画があることを教えてもらい、2月にわたしは現場の視察に行きました。このゴミ捨て場の面積は12,380ヘクタールと広大であり、集積しているゴミは高さ10m近くとなっており、すさまじい量です。ゴミ撤去後の跡地には200床の総合病院が建設される計画があります。この計画には、国会とニアメ市、ニジェール政府、保健省、大統領府がゴミ撤去の事業に参画し、大統領夫人が事業の一部を出資するという、まさに国家プロジェクトとなっています。

ニアメ市当局より環境・砂漠化対策省に対して、この計画に対する協力要請があり、環境・砂漠化対策省

は財源不足によって一度、この要請を断ったものの、わたしたちのJICA草の根プロジェクトと結びつけ、ニアメ市当局がレンタルしたダンプカーにより、環境・砂漠化対策省の監督のもとでゴミが緑化サイトへ搬送されることになりました。これまで、こちらが何度も依頼しつづけても、ニアメ市清掃局は動いてくれませんでしたが、ラザレ地区のゴミ撤去を遂行する上意下達によって、事態が急変することになりました。

ニアメ市当局のダンプカーによるゴミの搬入。1日に、のべ55台がゴミを搬入。

2月末から1ヶ月のあいだ134台分のゴミが緑化サイトまで搬送され、12月までの30台とあわせて、合計164台のゴミが輸送され、プロジェクトの目標150回をクリアーすることになりました。ダンプカー1台のゴミ搬送量は実測で8トンほどであったため、164回の搬送量は1312トンと計算されます。すべてが完璧というわけではありませんが、まずは目標をクリアーしたことをうれしく思います。ニアメで仕事をサポートしてくれているスタッフ、JICAニジェール支所の山本主税さん、小畑永彦支所長、アブドゥさん、JICA関西の担当者の大釜正希さん、京都大の経理業務をしてくださっている方々をはじめ、みなさんの支援には深く感謝しています。

ニジェール人、とくにハウサの人々が好んで使う言葉にハンクリ（忍耐）とハルクキ（動き）という言葉があり、この支所便りでは何度か紹介した記憶があります。わたしは日常生活のなかで、このふたつの言葉をとても気に入っています。忍耐強く仕事をし、めげることなく、打開策を得るために動きつづける。それが成功につながるかどうか分からないのですが、人生を切り開く術なのだということをかみしめています。

支所の活動紹介 1

灌漑整備用機材の引渡しセレモニー

一列に並んだダンプトラック、散水車、給油車など

2023年4月13日(木)、無償協力協力事業「灌漑稲作振興のための農業水利整備公社(ONAHA)機能強化計画」の機材供与式を実施しました。2019年に贈与契約を結び、コロナ禍の影響で機材到着の遅延が生じましたが、何とか無事にここまでこぎ着けることができました。

ニジェールは約2,270万人(2020年国家統計局推計)の人口を擁し、国土面積の約3分の2がサハラ砂漠で覆われております。基幹産業である農業のほとんどは短期間かつ不規則な降雨に頼る天水農法であり、雨季作の穀物(トウジンビエ等)は1年間の世帯消費量を賄えておらず、食料増産が急務となっています。

このような状況の下、ニジェール政府は国内にある既存の灌漑水田である農業水利区の修繕・維持管理に加え、2030年までに82,507ha(私が好きな青森市と同じぐらい)の新たな水田用の灌漑農地の開発を通じて、コメ生産を推進しようとしています。

本協力は、灌漑農業基盤整備・維持管理に必要な機材を整備することにより、ONAHAの機能強化を図り、コメ等の農作物の生産拡大を通じて灌漑農業に従事する農民の生計向上及びニジェールにおける農村開発を通じた食料安全保障の達成に貢献します。

写真左：ホイールローダー、写真右：コンクリートミキサー

2023年4月13日（木）8時半より式典が開始。ONAHA所長は日本の協力に感謝を述べ、「これらの機材を用いて、まずは1,000 haの新規灌漑農地開拓と、749ヘクタールの既存灌漑農地の修繕から始める」という具体的な今後の計画を発表。農業大臣の代理である牧畜大臣は「持続的な灌漑農地の整備を促進させ、自然災害から富を守り、国が定めた開発目標に沿う形で産業化へのサービスを担保していく。機材は適切に使用することを約束する」といった言葉が述べられました。

あるONAHAの技術者は「他の開発パートナーが供与してくれた第三国製の機材もあるが、1-3年で壊れた。私たちは長く使うことができる日本製を本当に信頼している。もし日本以外の第三国製の機材が届くならば、初めからないほうが良い」と言います。今回の協力ではバックホウ、ダンプカー、散水車、ワークショップ車、ピックアップトラック、ホイールローダー、コンクリートミキサーなどの機材の他、旋盤を始めとしたメンテナンス用の整備機材も供与。これにより部品が壊れた時に修理することも可能です（写真右）。

機材到着の際には、日本より技術者が派遣され、初期動作確認、機材使用方法、安全管理、カイゼンについて協働しながら研修も実施。全ては安全に、正しく、そして少しでも長く使用してもらうことを目的にしています。

ONAHAには35年前に日本が提供した機材が今も現役で使用されています。日本の積み重ねられた技術や知見が、ここニジェールで根付いており、この国の食料問題の解決に向けて取り組みが進められています。

これからもコメの生産量向上に向けてフォローを続けていきたいと思います。この機会に本プロジェクトにご尽力いただきましたすべての関係者の皆さんに御礼申し上げます。（企画調査員　山本）

技術指導を担当いただいた村田さん

2022 年 6 月に実施したバックホウの引き渡し式の様子

支所の活動紹介 2

学校清掃キャンペーン 2023

研修中の手洗いコンクールの様子。盛り上がる参加者ら。

私たちは「アフリカきれいな街プラットフォーム（ACCP）」のフォーカルポイントである環境・砂漠化対策省（以下環境省）とともに2017年度よりニアメ市内における清掃キャンペーンを実施しています。毎年進化を続ける本キャンペーンの第5回目は、新たなパートナーとして国民教育省を迎え、無償協力協力事業で建設された3校の中・高等学校を選定し、活動を実施しました。

教育省の環境教育課との顔合わせの際に、課長から「何年も学校菜園の予算書を提出しているが、省内でも予算が付かない。課はあるが活動はない。何のためにこの課が存在しているのかわからない」と本音がポロリ。学校菜園は生徒の「生産的実践活動（図工のような手を動かして体験して学ぶ活動）」にとって重要であり、栽培した苗やモリンガの販売収益は学校の収入源になるといいます。既に100万FCFA（日本円で20万円程度）の収益を上げた学校もあり、これにより教室の机や椅子の修理・購入に充てられています。教育省としても「一校一園芸」という明確な方向性があり、「学校をきれいに保つ」という清掃キャンペーンのコンセプトにも合致したため、環境省とも相談後、2省の連携を進めることにしました。

今年は①学校での研修（各校100人）、②スローガン・寸劇コンテスト、③学校での清掃活動、④清掃道具・廃タイヤを用いたベンチの供与の4本立てで活動を実施。①の研修では校長、教員、学校運営委員会、生徒、警備員を対象として2日間の研修を実施。環境省はニアメ市から出るゴミの種別、ゴミの質による土壌分解必要年数、昨年の清掃キャンペーンの様子などを紹介し、教育省は園芸栽培の重要性、運営・管理方法などを紹介。学校から排出されるゴミは、枯れ葉といった有機ゴミも多く含まれるため、環境省がコンポストの作り方を紹介することで、教育省が説明する園芸栽培に活かします。

支所便り読者の皆さんお馴染み大山先生も学校研修に飛び入り参加!

寸劇の審査会の様子。みな真剣な面持ちで動画を観る。

②のスローガン・寸劇コンテストでは、今年も「私の学校をきれいに守る」をテーマに1校1スローガン(+それを体現する寸劇)を募集。関係者と外部有識者の審査の結果、Dan Zama Koira中学校の「私たちは、私たちの身の回りの清潔さを守ることを約束します」が最優秀賞に選ばれました。審査員は「対象3校のうちここだけが学校を取り囲む塀がない。そのネガティブさを払拭し逆手に取った寸劇だ」と絶賛。私は審査員ではなかったのですが、ちょっと他校と比べてメッセージが曖昧かもという印象だったため、まさかの最優秀賞になるとは。この寸劇は環境省によって2-3分の動画に編集され、WhatsAPPで生徒に共有されます。2020年度に環境省のコミュニケーション部門の能力強化を行った後、すでに30本以上の動画が作成されており、彼らの熱意と年々クオリティの高まりを感じます。

清掃キャンペーンの目的は、単に『学校をきれいにする』だけでなく、病気の予防、集団行動での協力、責任の分担、美意識や思いやりを育むことにあります。学校園芸を通じて作物の栽培のプロセスを知ることは、教科書では学べない体験と好奇心を育みます。ニジェールの人口の半分は15歳以下であり、2/3以上が25歳以下です。学校は、カリキュラムを学ぶことと同時に、社会の中で生きていくための準備期間という側面もあります。今後も清掃キャンペーンを通じて、学校美化のみならず、生徒が自立した大人になるための価値観や行動基準、社会との繋がりが構築できるような活動を継続していきたいと思います。

(企画調査員　山本)

供与式では寸劇の実演も実施。生徒のテンションが一番上がった瞬間でした。最優秀校には生徒の学習机・ベンチを副賞として供与しました。

OY の発見記：苦行のラマダン

今年のニジェールのラマダンは最も暑いと言われる期間で実施された。

ラマダン前には日本人の同僚と「現地スタッフ（全員がイスラム教徒）の前でコーヒーとか飲むのは憚られるねぇ」なんて話をしていたが、ラマダン初日から私の辞書から配慮という言葉が消えた。

始業10分でコーヒーをデスクで飲みたい衝動にかられ、現地スタッフには、「皆の前でコーヒーは飲ませて!」とお願いし、彼らも「私たちの儀式はそんなことでは揺るがないから大丈夫!」とニッコリ。

数日後、やっぱりコーヒーだけでは口さみしい。目の前のスタッフには「喉痛いから目の前でアメなめさせて（そこまで痛くはない）」とのお願いにも、「僕は13歳からラマダンをやってるんだ!そんなのどうってことないよ」とこれまたニッコリ。そこからは私の暴飲暴食は止まらない。出張者等から差入いただいた日本のお菓子などはもったいないという理由で時間かけてゆっくり食すため、彼らにとっては嫌がらせでしかない。

帰宅後も暴飲暴食は続く。ラマダン期間中は執務時間が変更になるため、陽の高いうちに帰宅できる。手を洗い、ビールの栓を抜き、作り置きを食してゴロリ。ただ、これが早すぎる食事となるせいかで小腹がすき、寝る前に麺をすすることになる。

また、昼食屋台が閉まっているなどでいつものペースが乱されてることに苛立ち、「屋台もやってないし、家で食べすぎちゃうし、全然楽しくない!」とスタッフに愚痴る。すると、「知っているかい?数年前にオートファジーとして長時間食事を抜くことは健康に良いことだと学会発表があったんだよ。だから、ラマダンは理にかなっているんだ」と理路整然と語られた。「知ってるわ。けど、日本で何度もチャレンジして、これだよ。万人向けとは限らない理論なんだよ」と反論してみたものの虚しい。

結果、ラマダンは風邪をひく、太るなどさんざんな結果であった。

ちなみに、同僚は最後まで配慮を欠かさなかった。現地スタッフには日本人というナショナリティが一緒でも百人百様だということを学んでもらういい機会だったであろう。めでたし、めでたし。

写真は寝る前の麺。常に半麺です。　（企画調査員　大弥）

ご意見・お便りはこちら！ ni_oso_rep@jica.go.jp
過去の支所便りは**こちら**もしくは右の QR コードから
編集長：支所長 小畑　/　編集・デザイン：企画調査員 山本